

国際ロータリー第2560地区
ガバナーテーマ

「クラブと地区の
変革をめざそう」

高田ロータリー今年の
スローガン

「しなやかな変化で
奉仕を高めましょう」



ロータリー：
変化をもたらす

2017～2018年度

国際ロータリー会長 イアンH.S.ライズリー
2560地区ガバナー 新保 清久
高田ロータリー会長 橋詰 敏一
幹事 田中 正人

事務局：新潟県上越市西城町2-10-25 大島ビル201号
TEL (025) 526-3288 FAX (025) 526-3534
メールアドレス：takadarc@joetsu.ne.jp
例会場：デュオ・セレッソ TEL (025) 526-3111

クラブ広報・会報・雑誌委員
箕輪 賢一 堀井 靖功 渡邊 隆 山田 守
小池 猛紀

第8回例会 ■ 9月1日(金)

No.8

会長挨拶 ● 橋詰 敏一



今日から9月です。夏らしからぬ夏が終わり、残暑と思いきや、季節は9月を飛び越し10月の気候です。昨夕は、西の空に「あかね雲」が美しく映えておりました。

さて、9月1日は「防災の日」という事で、国や各地方でも各々訓練が行われているようです。此の頃はどうしたものか、国内でもしばしば災害が起き、私共の心を振わせませす。災害大国日本と言った所です。その成り立ちを含め、地球上希有な島国であるわが日本、美しい自然、豊かな自然を地球は私共に与えるだけではなく、多くの試練もまた与えます。日頃よりの備えの重要性を再認識する日としたいものです。

また、9月はロータリーでは基本的教育と識字率向上月間、並びにロータリーの友月間です。ロータリークラブは、世界において多くの教育的プロジェクトを展開してきました。また、継続しています。我が国は、その教育水準は高く識字率は問題となる事はありませんが、一つ見方を変えようとグローバルな世界において、各々な国々の人と会話、意志疎通ができるかという点、つまり今では共通語としての「英語」を使えているかの点からは、その識字率は低いと言えます。小学校からの英語教育が行われようとしています。2019年ラグビーワールドカップ、2020年オリンピック・パラリンピック、2021年の世界マスターズ大会

を向かえ、我々はもっと日常的に「英語」に触れる機会が必要と思われませす。

出席報告

出席率 98.15%

セレモニー

感謝状贈呈 (ロータリー財団)

クラブ：

2016-17 年度年次基金一人当たり寄付額 2位

2016-17 年度年次基金クラブ総計寄付額 3位

三井慶昭君：メジャードナーレベル2



委員会報告

社会奉仕委員会——地球環境保全のための植樹事業のご案内

R財団委員会——財団セミナー出席報告・寄付のお願い

会員インフォメーション

古淵英一君——10月27日 北越銀行創業140周年記念講演会のご案内

講演会：15:30～ 会場：デュオ・セレッソ

卓 話

私の見たロシア「60個の卵と日本語」



1. はじめに

私は、1991年9月から1993年3月までの約1年半、当時の文部省及び自治省の主権による外国教育施設日本語指導教員派遣事業（REX計画）の一員として、ソビエト社会主義共和国連邦（ソ連）極東地域の軍港ウラジオストク市にあります、極東国立海洋アカデミー（船員養成のための国立大学）で、ロシアの学生に日本語を教えるという貴重な経験をさせていただきました。当時新潟県は金子知事の時代で、県全体で環日本海の経済及び文化交流が積極的に進められている時期でした。教育分野での人的交流の第一弾として、日本語を指導する教師を派遣するということになり、私がその第一号として選ばれ、派遣を受けることになったわけです。

2. 「60個の卵」について

1991年8月にモスクワでクーデターが勃発し、当時のゴルバチョフ大統領が失脚、最高会議議長であったエリツィン氏がクーデターを鎮圧し、自ら大統領に就任するという大混乱の中、日本海を渡りロシア極東のウラジオストク市で生活することとなりました。

当時はソ連邦の末期時代でしたので、統制経済は崩壊状態で、商品の流通は滞り、国営商店には腐りかけたジャガイモなどわずかな野菜しかなく、買い物する人などほとんどいない状況でした。国営農場で作られた作物をトラックの運転手が勝手に路上で売りさばってしまうため、国営商店には商品が届かなくなっていたのです。当時のウラジオストク市民は、いつトラックが道路で商品を売り始めるか分からないため、常に買い物袋を持ち歩くのが習慣となっており、私も外出する際はリュックを背負って出かけることにしていました。ある日、街を歩いていたら、卵を持ち歩いている市民とすれ違いましたので、付近を探しましたところ、案の定大量の卵を積んだトラックが路

新潟県立高田高等学校長 小野島 恵次 様

上で卵を売っていました。久しく卵を食べていなかった私は、思わず60個も卵を買ってしまったのです。その卵をリュックサックの中に1つ1つ丁寧に入れ背負ってアパートまで帰りました。その時の60個の卵の重さと、アパートでオムレツにして食べた久しぶりの卵の味が、未だに忘れることができません。お金より物があることの有り難さをつくづく感じさせられました。

3. 「日本語」について



元々高等学校の英語教師ですので、私にとって外国語といえば常に英語でした。しかし、ロシアの学生に外国語としての日

本語を指導するという経験をしてみて、「日本語も英語と同じ外国語の一つであること」、「日本人でありながら、母語である日本語のことを意外と知らないこと」を痛感させられました。

例えば、「花」と「鼻」の発音の違いは？「お湯を沸かす」となくなるのでは？「象は鼻が長い」という文章の主語は？など、日本語は話せても、どう説明したら良いのか大変頭を悩ませられる質問を、ロシアの生徒たちから受けました。

外国語を扱う教師として、「外国語（言葉）としての日本語」を学ぶことの大切さと面白さを今後とも是非大切にしてゆきたいと思っていますし、校長として、学校教育におけるグローバル人材の育成を推進するという観点からも、母語である日本語を大切にすることで、日本人としてのアイデンティティーを大切にしつつ、英語という言語を使って、様々な言語や文化、歴史を持つ世界中の人々と積極的にコミュニケーションを図り、人類の平和と繁栄のために活躍できる人材を育ててゆきたいと思っています。